大正十四年八月十三日
（第三種郵便物認可）

昭和二年九月十二日印刷納本
昭和二年九月十五日發行

（毎月一回十二日發行）　第六卷第八號

眞生

第六卷　九月號

◇◇◇◇◇◇◇

□眞實の信仰はその人各人の宗教の体驗によるものであつて決して、人と同じとか異ふとか、そんな問題でやかましく云ふべきものではない。

□それよりも、眞實の信仰は先づ自分たちははたして自分に眞の信仰があるのであらうか。そしてそれが果して、眞に自分を滿足せしむるにたる、眞に尊き完全の宗教であるかどうかをこそ反省すべきものである。

□然に近頃の人々の中に、ともすると、自分には未だ何等の信仰もない僻せに、反て、人の信仰をのみ云々して、得々たらんとするものさへあるは實にいやしむべき事柄である。

□一体、眞實の信仰は各人の胸深くひめられて、さう單なる外見だけでは之を批判することはむづかしいものであり、又各人の個性も各々異う上からは、さう信仰も何から何まで一致すべきものとは限らないはずである。

□然を何にもかも之を一致せしめ、又それによつてのみ、本當の宗教があると、一切を多數決にきめやうとすることは、已にそのことが宗教の本質を誤まつたものであり、其の信仰を殺すものである。

□然乍ら、凡そ眞實の宗教は決してさうしたものであつてはならぬ。先づそれは各人自らに眞に信ずる信仰であり、生活であり、自ら生きる力の宗教そのものであらねばならぬ。（念）

◇◇◇◇◇◇◇

目次

庭掃き三昧　尅子
行乞の釋迦　土屋觀道
法然上人日頃の御詞　土屋觀道
私の懷疑　山口常照
懷疑に答ふ　土屋觀道
唐澤三昧會に就て　土屋觀道

□私の家の裏に棲む佐市さんは「どじよう」の好きな人で、月に一遍休みの日は必ず蓮田へ鰌取りに行かれます、そして夕餉には丹精の鰌汁が一杯私のところへも惠まれます。

□されど豆腐や手蕚の中へ頭を突込んで、ピンと尾を差し上げてゐる鰌の樣を見ると、とても喰べる氣にはなりませぬ、恐る〳〵汁だけを吸てソツト捨てに行きます。

□鰌を煮るのには始め豆腐と一緒に汁の中へ入れて置いて下から炊くのだそうです、すると鍋の燒けて來るに從て鰌は逃場が無く、少でも冷かい豆腐の中へ潛ぐるのだそうです、而し潛つてゐても豆腐ぐるみ煮られて到當ろうそくのやうに眼子張たまゝ煮られて了ふのです。

□私達も今人生といふ小さい鍋の中で泳ぎ廻つてゐます。けれど泳いでゐる儘で尻の方から刻々煮ゐ上て來ます、苦してならぬから金だとか、結婚だとか、藝術だとか、宗教だとか云ふ冷奴の中へ頭を突込んで無理我慢をしてゐます、けれどその金ぐるみ、その藝術ぐるみ、其信仰ぐるみ丸煮にせられて死んで逝きます。

□見渡せば大も小も、賢も愚も皆鰌ばかりであります。大鍋の中を皆が驅けめぐつてゐます、そして色々なもの、中へ頭を突込んで一時苦しさを忘れてゐるばかりです。

□本當に此の鍋から解脱する法はないものでせうか、此の死から遁がれる方法はないものでせうか、皆が直劍に省ねばなりませぬ。（尅）

庭掃き三昧

▽釋尊の御弟子の一人に周梨槃陀伽といふ人がありました。

▽この人は性來大癡驢鈍な人で麥と豆との見分けをすら出來なかつたと云ひます、だから經の一偈を敎へられても、九十日かゝつても一字も覺ゑることが出來ぬ、流石の兄の沙伽陀も恥かしくなつて、もうお前は僧になることは止めろ、と云て祇園精舍の門外へ突き出した。

▽遇々釋尊が托鉢からお歸りになつて門前で泣いてゐる彼の樣を御覽になり故を問はれた槃陀伽は有り体に樣子を申上げた。すると釋尊は何とも被仰らずに輕く頷いて、手をとつて立たせ、靜かに僧坊へ連れて行かれた、そして一本の箒を與へて室内を掃くやうにと云ひ付けられた。

▽それからは庭や坊中を掃くだけが彼の仕事でした、春になつても夏になつても掃くといふことより外は仕事はありません。それだから到々一の疑問が起て來た――釋尊が私にだけは座禪も托鉢もさせずに庭掃きばかりさせられるは何故か知らぬ――と思へて來た。その時！

▽これは私の心を掃除せよといふ意味なんだな――と氣が附いて來た。その時郭然として羅漢果を得たと云ひ傳へられてゐます。

▽信仰といふことは、そう六つかしい事ではないと思ひます、誰に聞かなきやわからぬとか、什う云ふ本が讀めなきやわからぬとか云ふのでなく、自分で自分の胸のドン底へ聽いてやれば、必ずそこから如來樣のみこゝろが聞へて來ます、そうして自己がそのみこゝろによつて統一され、馴釀されてゆくことであります。

▽皆が本當に解し易い、解し易くて然かも成じ難い。そこに信仰の事實といふものは極く近いところに轉がつて居り乍ら、又遠方のものであります。

▽而し一歩〳〵一掃〳〵成しとげて行くところに一つ〳〵完成されてゆくのですから、此刹那、此立處を起点として人格修行に發奮せなくてはなりませぬ。（尅）

行乞の釋迦

（佛を見る者　三）

土屋觀道

一、

次に見たものは托鉢の釋迦でありました。みすぼらしい弊衣に身をまとうた神々しい釋尊が、一つの貧民窟らしいあばら屋の前に一鉢を手にして立つて居られる所であります。

何故に釋尊はかうしたみすぼらしい姿をしてゐられるのであらう。そして又、何故にかうした貧民窟のやうなあばら屋の前に立つてゐられるのだらう。今少しく、身なりもよくして、よさそうではないか一國の王子としてまで生れて來た釋迦がいかに悟りを開いたからとて、かうした弊衣に一生を終るといふ必要はない。又同じ托鉢をするにしても、今少し富豪の人の家の前にも立つてよささうではないか然に何を以つて、かうした貧家の前にのみ立つのであるか、托鉢といふことが人の家の前に立つて、施物を求むるものならば何も貧家の前に限つたことではない、むしろ王家の前とか、富豪の前に立つ方が便利でないか。それに普通の常識から考へて見ても、多くの世人は衣食に困つてゐる、それをわざ〳〵貧民から貰ふ位いなら、反て貧民を困らすことである。さればむしろ食うに困らない富者の人から貰ふのが當然ではないか。殊にまた、何等の働きもせずして毎日人の門口に立つて物貰ふと云ふことは社會人としてあまりに正しいことではない。それにもかゝはらず、何故に釋尊はかうした行乞を貧者の家の前にせられたのであらう。それには何かそれ以上の眞意義があらねばならぬ。

このことに就て私はかつて聞いたことがあります。それは釋尊が成道せられて、初めて自分の故郷を訪ねられたことがある。その時の釋尊がやつぱり其の途上、其の城下の門前に途々托鉢せられたと云ふことであります。之を聞いた父王は使いを遣はして之を止めさせ、「若し貴下が食物を要求するなら、いくらでも父王から供養する、いやしくも朕が臣下に於て、父王の子たるものが行乞をすると云ふことは父王としての權威にも關するから、そんなことは止めてくれ」とこばまれた。其時釋尊はそれでも平氣で一向に耳にもとめずに、行乞をせられたと云ふことであります。

二、

其の後、私は長ずるに及んで此のことを一層深く考へるやうになりました。そして釋尊の行乞とは一体何を意味するものでありませう。托鉢とは普通、一般には釋尊が民家の前に立つて、行乞せられることと解されてをるのであります。從て、私共は之を今日の禪僧や眞言僧の間に時々物貰ふ旅僧の姿として見ることがありました。そして未だ、淨土宗や眞宗の僧侶に之を見たことがありませんでした。其の後、行乞とは一体何の爲めにするのか、普通の非人乞食とは其の趣きを異にしてゐるやうであるが、それでも食時に他人の前に行乞をすることはやはり食はんが爲めの行乞ではないか。それともやはり自分の修行として、他人の前に毎日行乞を行ふの釋尊の敎であらうか。それとも亦、更にそれ以外、尙何等かの意味があるのであらうか、私には少くともかうした一二の疑いがあつたのでありました。然に行乞とは其の實、さうした意味ではなかつたのだといふことが始めて、私が信仰に入ることによつて、はつきりとして來たのであります。それは行乞とは字の通り、乞を行ずること、いはゞ物貰いでありますが從て行乞とは乞食のことにもあたり、鉢の中に食を求むによつて托鉢とも云ふのでありますが、而も此の

乞食はこじきが物を貰ふのとは甚だ似て、甚だ非なるものでありました。

凡そ物を貰ふとは佛敎では即ち供養を受けることであります。供養とは人からうけるものではありますが自ら人に強ゆるものではなく、人から與えられるもの、即ち人から供養せられるのでありまして、眞に其の供養に應ずることのできるものは、即ち其の資格のあるものでなくてはならぬ。從て此の供養に應ずることのできる資格の人を、應供の人と申すのでありまして、佛陀その人でなくてはならないのであります。即ち供養を受けるに値いする人、之を應供の人と申すので、此の意味に於て、托鉢の聖者は正しく佛陀その人でなくてはならないのであります。今この心を以つて、畫かれたのがダゴールの行乞の釋迦であつたのであります。

三、

そこにはおごそかなる佛陀の自覺が、寸臺も犯かされてはなりません、否犯されるどころか、むしろそれによつて、即ち行乞の佛陀が、眞に佛陀としての光を輝かすものがあらねばなりません。食そのものがほしいのではない、施食の友の心がほしいので、その行乞によつて信者の心に、佛陀の光を與へるのであつたのであります。施食の友とは布施人のことであります。而て布施人の心がほしいとは布施人の供養の心そのものであるのであります。而て供養の心とはそこに佛陀をあがめ、佛陀を慕い、佛陀に物を供養するその人の清き精進の心であります。而も此の心を釋尊が富豪の人の上に求めずして、今この日常の生活にも困してゐる貧家の家の人々に乞い求めらるゝと云ふことは釋尊の宏大なる慈悲の心でなくては到底想像することもできないところであります。而も此の心を、釋尊の行乞の上に見やうとするのが、此の畫のつかみどころであります。

「何と云ふなつかしい世尊の姿よ！」そして又「何といふ莊嚴の姿よ」と私はひそかに世尊のこの姿を拜しては、涙なくしてはどうしてもいることができぬのでありました。若し世の多くの人々が此の釋尊の御心を少しでも伺い知ることができますならば、世は忽ちにして眞生の淨土となりませうものを。而て之を今日の行乞の人、托鉢の人、寄附金强達の人々に知らしめたならばいかばかりでありませうと、私の心は更に一層の世尊の尊さと現代の淋しさとを感ぜずにゐられないものがありました。

四、

而て私の心は更にそればかりではありませんでした。當時世尊に施物を献げた民衆の幸福、即ち世尊に供養して喜んだ其の施食者の幸福を羨ましくも亦喜ばずにはゐられませんでした。

承るところによると、印度の習慣として、印度の民衆は自分の食物の中から、先づそのはつものを分けて之を當時の聖者に供養すると云ふことが常であつたと云ふことであります。而もこの供養の心、この心を靜に味ふて見るならば、凡そ人とし人と生れ來て、自らの衣食の中から、それのおはつほを、自ら信ずる聖者の前に衷心から献げるといふことは、世に之ほど幸福なことがまたとありませうか。人から聖者として物を受くるといふことも自ら德ある人の生活として、若し出來ることならば之また尊いことではありますか、更に私共はかうした意味での人からものを受くるよりも、かうした意味で、人に物を献ぐることのできる清い信者としての至眞の心持ちをもちうる自分を幸福なりとして喜ばずにはゐられません。供養の心たとへば單なる花一枝でも、自分の心から之を聖者に供養することのできる仕合せは、其の自分の心の純心さと併せて靜に自分に思ふとき、おそらくは到底何物にもかへることのできない尊いあるものがあるのであります。而もかゝる氣分を以つて、之を釋尊の御前に毎日供養することのできた之等民衆の心こそ、何と惠まれた生活でありませう。否、少くとも彼等の心の奥底には此の釋尊の行乞によつて、此の美しい、而も尊い供養の心を、此の釋尊によつて起させて頂いていたことも事實

であります。言かへれば是等の人々は此の釋尊の托鉢によつて、此の尊き美い心を毎日起させていただいてゐたとも云ふこともできるのであります。而して又此の食ふにも困まる貧困の中にも、釋尊の尊い人格の力はいつしか彼等の貧困のつらさも忘れしめ、いとたかき如來の御光として、限りなき喜びの生活に生き活かしめ、またなき人生の幸福を心から感受せしめられたと云ふことは、そこにまたあらゆる階級を超越した佛陀の光を此の托鉢を通じて伺ふことができるのであります。即ち釋尊の托鉢には富貴貧賤を論ぜず、あらゆる階級の差別を離れた一味の良風を示すものがありまして、あますところのないのさへ明に見ることができるのでありました。否それどころではありません、更に靜に此の釋尊の行乞を見るならば反つて貧者の一燈に長者の萬燈にも勝る至幸の生活を見出すものがあるのであります。富めるが爲めに一パイのそばが食ゐないで、遂に臨終を迎えたといふ富豪の話もあります。富めるが爲めに、反て一家の爭ひを起し、位貴きが爲めに打あけて心のまゝさへ話せないあはれな人もある世の中。如來を信ずる平民の心にはそこには反つて、王侯貴族も味ふことのできない尊い、清い自由な純心の施物の心があることを忘れてはなりません。

五、

世には位高きを以て貴しとし、家富めるを以て幸福とのみ考へて居る人の多い世の中に、學もなく、位もなく、家貧にして、とるにもたらぬあばらやの人々にも、如來を信ずる信者の心にはかうした、何ものにもかへ難い貴い供養の心さへ、春の日のうら、かなそれのやうに、起しうるものであることを喜ばずにはおれません。即ち此の釋尊の行乞にはかうした慈光がみなぎる春の大洋の如くたゞやうてゐるのを見るのであります。

されば私たちの一生は此の釋尊の托鉢を通じて、充分に其の行く道を示されてゐるのであります。また、そこに釋尊の托鉢を通じて、釋尊の心を知り、釋尊の人格を通じて、そこに眞の佛を見ることができるのであります。世に佛を見ると云ふことは必ずしも、釋尊の姿を見ることではありません、凡そ如何なる場合にも、佛を見ると云ふことはそれによつてその佛の人格を見、その佛の人格によつて、私共の心が又佛の如く、淨化せられて行くところになければならぬのであります。

こゝまで考へて今私は此の釋尊の托鉢を思ふとき、確に世尊の托鉢は單なる世間の物貰いの爲めの行乞ではなかつた。我等の如き貧者を救ふ佛陀の心が直に貧を超にた如來の光として、私共の心の中に透徹してくるのを覺ゆるのであります。（於强羅九、四、）

慈　經

サトウ

生き生きとした詩が書きたいが
理窟ばつたものばかり
よい詩はとても生れません
今夜は十五夜お月さま
尊いご本を引き出して
月の光にほのぼのと
佛陀の教を讀みました
「ひとり子の生命を護る母の如く、人は萬物に對
し限りなき慈悲心を抱くべきである。世界のあら
ゆるものに對して上に向ひ下に向ひ傍に向ひて限
ることなく、更に敵なく仇なく、限りなき慈悲心
を抱くべきである。
行住座臥に拘らず醒めてある限り人はこの心を以
て旨とすべきであるこれ聖者の生活である。」

法然上人日頃の御詞（一）

土屋觀道

「以下は上人の日頃の御詞として勅修御傳第二十一に載せる所であります。味ふ可きことの多い爲めに、現代語に譯して見ました」

○

口傳なくして淨土の法門を見るのは其の得分を失ふものである。そのわけは極樂への往生は上は天親龍樹をすゝめ、下は末世の凡夫、十惡五逆の罪人までですゝめてある。それを自分が凡夫であると云ふので、善人をすゝめられたのを見て、卑下の心をおこして、往生を不定に思ふて、順次の往生をとげぬのである。だから、善人をすゝめてある所を善人の分と見、惡人をすゝめてある所を我分と見て、得分とするのである。この見定めさへつけば、決定往生の信心がかたまつて、如來の本願に乘じて順次の往生ができるのである。

○

念佛申すには全く何の仔細もないのである。たゞ申せば極樂へ生れると知つて、心をこめて申せばまゐるのである。

○

南無阿彌陀佛とは別だんのこと、思つてはいけない。「どうぞ阿彌陀さま私をたすけて下さい」といふことばだと心得て、心には「阿彌陀さまたすけて下さい」と思ふて、口には南無阿彌陀佛と唱へるのを三心具足の名號と申すのである。

○

本願の念佛には、ひとりだちをさせて、すけさゝぬのである。すけといふのは、智慧をすけにしたり、持戒をすけにしたり、道心をすけにしたり慈悲をすけにしたりすることだ。善人は善人で念佛し、惡人は惡人で念佛し、たゞ生れつきのまゝで念佛する人を、念佛にすけさゝぬとは云ふのである。然し、惡をあらため、善人となつて念佛する人は、佛の御心にも叶ふことであらう。できぬからといつて、どうあらう、かうあらうと思つて決定心のおこらぬ人は往生のできぬ人である。

○

「佛阿難に告げたまはく、汝好くこの語をたもてこの語をたもてとは即ちこれ無量壽佛のみ名をたもてとなり」と云つてある。名號のいはれをきいても信せぬではきかないも同じだ。また、たとい それを信じても、唱へないならば信せないも同じだ。結局はたゞ一向に常に念佛すべきである。

○

近頃の行者たち、觀法をすることなかれ、佛像を觀じても運慶幸慶が造つた佛ほどさへも、觀じあらはすことはできないであらう。極樂の莊嚴を觀じても、櫻や梅や桃李の花はども觀じあはすことはできない。たゞ「彼佛今現に世に在まして成佛したまへり、當に知るべし、本誓の重願むなしからず、衆生稱念すれば必ず往生を得る」の（善導の）釋を信じて、ふかく本願をたのんで、一向に名號を唱ふべきである。名號を唱ふれば三心も自ら具足する。

○

往生の業成就は臨終平生にわたるのである。本願の文にはつきりと別けてはない。惠心の心も平生にわたると見える。

○

他力本願に乘ずるに二ある。乘せないに二ある乘せないに二と云ふのは一には罪をつくるときに乘せぬ。其の故はかくの如く罪をつくれば念佛申しても、往生は不定であると思ふとき乘じない。二には道心のおこるとき乘せぬ。其の故はおなじく念佛申しても、かうした具合に道心があつて申す念佛であつてこそ往生はするのである。無道心（無信仰）では念佛しても（往生は）できるものでないと、道心をさきとして、本願をつきに思ふとき乘じないのである。次に本願に乘ずるに二の樣と云ふのは、一には罪つくるとき乘ずるのである。其の故はかくの如く罪つくれば、きつと地獄

に落つるであらう。然に本願の名號を唱れば決定往生ができることの嬉しさよと喜ぶときに乘ずるのである。二に道心のおこるとき乘ずるのである其の故は此の道心では往生はできない、これほどの道心は無始よりこのかたおこるけれども、いまだ生死をはなれない。故に道心のあるなしにかゝわらず、罪の輕い重をいはずたゞ本願の稱名を念々相續する力によつてこそ往生はとぐるのだと思ふときに、他力本願に乘ずるのである。

○

獵師らにかこまれた鹿も、友に目をかけんで、人影にからず、向つた方へ、おもいきつてまつしぐらににぐれば、いくへに人があつても必ずにげらるゝのである。そのやうに他力を深く信じて、萬事を忘れて、一向に往生しやうと思ふべきである。

○

稱名念佛の時に心に思ふべき樣は、人の膝などを引つぱつて、どうぞ助けて下さいと云ふやうなものだ。

○

七日七夜心無間といふのは、明日の大事をかゝすまいと今日せいだすやうにすべきである。

○

人の手から物を得るのに、すでに得たのと未だ得ないのといづれが勝さつているだらう。源空はすでに得た心地で念佛は申すのである。

○

往生は一定であると思へば一定であり、不定であると思へば不定である。

○

念佛申すものが十人あるとして、たとい九人は臨終がわるくて往生せないでも、自分一人はきまつて往生すると思ふべきである。

○

一丈の堀をこねやうと思ふ人は一丈五尺をこねやうとはげむべきである。往生を期する人は決定の信をとつてあいはげむべきである。

○

いきたら念佛の功つもり、死んだなら淨土へまゐるであらう。どちらにしても、この身には思いわづろうことはないと思つてゐるから、生死共にわづらいがない。

○

或る時上人が「まあ、こんどはしとげたいものだ」など仰せられたのを、乘願房が聞いて「上人でさへこんなに不たしげに申されるやうでは、其の外の人はどうしますか」と云つたら、上人打ち笑ひなされて、「まさしく蓮台に登るまではどうして此の思ひがたへるものか」と申された。

○

或る人。「上人のお申しになるお念佛は念々ごとに佛の御心にかないますことでせう」と申したのを、「どうして」と上人がといかへされたので、「智者でゐらせますから、名號の功德をもくわしく御存じだし、本願の意味もあきらかに御承知であるから」と申したとき。「それでは御身は本願を信ずることはまだであつたか。彌陀如來の本願の名號は、木こり草かり、菜つみ水くむ如き類の人々の內外ともに、一文不通の人がとなうれば必ず生ると信じて、眞實にねがつて、常に念佛申すのを最上の機とするのです。若し智慧をもつて生死をはなれるほどならばこの源空どうしてかの聖道門をすてゝ、この淨土門に赴むかう。聖道門の修行は智惠をきはめて生死をはなれ、淨土門の修行は愚痴にかへつて極樂に生まるゝと知るべきである」と仰せられた。

私の懷疑？

山口常照

土屋上人！私の最近の生活の心持といふものは、眞生誌上に發表さして貰つた樣な「不死の自覺の第三期」及「無駄なき生活」の中に表はれて居ると思ひますが、先頃教學週報に上人が紀伊溥雲氏の問に對して「光明主義の念佛」の題下に應答をせられました。それに對して、竹中氏の反駁があり、超えて全國光明會聯合事務所の井上氏が上人の說に對してうら淋しい釋明をせられました。(一)それ以來私の胸の中にはいろ〳〵の事が思ひ浮ばされます。殊に今は亡き葬榮上人の事どもそゞろに懷

しくてなりません。

勿論上人滅後の光明會が、分裂するといふ事は宗教史上から見て當然すぎる程當然でありませう。(二)釋尊の滅後、上座部、大衆部の二大分裂のあつた如く、法然上人滅後、鎮西、西山、眞宗と分裂した如く、辨榮上人の光明會も、上人の御人格が輪廓の大きい抱擁性に富んで居られたゞけに、其の感化を受けて人々が、自己の人格、思想、信仰の程度に應じて故上人の觀方は一人一人に異ると思ひます。此の觀方の相違から滅後分裂を來して居ると考へます。故に私は故上人滅後の光明會が分裂するのは、自然であつて、寧ろ滅後整然たる統一が出來たとすれば、それは不自然であり、變態だと思ひます。(三)此の如き事をいふと光明會に關係のない方々は、そんな事言つて分裂を裝はんでもと仰せられるかも知れませんが、私は分裂を裝はふなどゝは、毛頭考へません。たゞ私の考察するありのまゝを綴つてみて批判を仰ぐのです。

上人！私は今光明會に對していろ／＼の疑を持つて居ります。今私の懷疑を上人の前に披瀝して批判をして頂きたいと思ふのです。

先づ第一の懷疑は、禮拜儀の訂正問題から始まります。私は大正九年學校を卒業しまして國へ歸る事となり、一應故上人とは東京で袂を別ちました、恰度その年の六月私は祖山の夏安居に參加し、その飯途九州甘木の法泉寺にて故上人にお目にかゝり、それより飯郷しまして間もなく私は、住職して居た寺を或る都合で飛び出しまして、朝鮮に放浪の身となりました。かくて故上人の遷化の事は、平壤に放浪して居る時知りました。故上人の感化を受けた鮮人李仁譯と二人如何にその訃を悲しんだ事でありませう。故上人とは思へば甘木での別れが永の別れとなつた譯です。かくて大正十二年今の仁川に落ちついてから、九州光明會の會員の一人にさして貰つてる關係上、九州光明會に注文して禮拜儀を送つて頂きました。みますと故上人に隨待時代の禮拜儀が大分訂正されて居るのに氣づきました。(四)然し別段大して問題にする程、考へもしませんでしたし、仁川でも訂正されたまゝで使用して居ました。朝鮮に放浪の私は故上人滅後の光明會がどうなつたか、自己の道に生きる事に忙しい私は、關せず焉で居りましたが、確か大正十三年でしたでせう、九州田代の西淸寺で如法別時會が開かれました。幸その別時に參加する事が出來、同時に其の折、神戸の極樂寺で貴上人に五年振りに御目にかゝりました。そして故上人の滅後の光明會の有樣など概略承りました。其の時、禮拜儀の訂正に就て、一寸御話を聞きましたが、此の時も從前通りがいゝのか、訂正された方がいゝのか大体問題にしませんでした。然し問題にしなかつたのは私の思想信仰の未發達を物語るのであつたの

山口師の懷疑に答ふ (一)

土屋觀道

(一)竹中氏の「光明主義」に就ての私への論駁は氏が本文を誤讀しておられ、而も根本から誤まつた勝手な反駁をしておられるので私も氣の毒に思つて居ります。又井上隆森氏の光明主義に對する辯明は全々其の意味をなさないので相手にするの必要もなく、そのまゝに默殺に附しておきました。然に其の後貴師からの二氏に對する週報誌上の質問と反駁とは全く私の意を得たものと思つてゐます、二氏は之に對して何とお答なさるでありませう

(二)光明會の分裂は主義としては悲しいことです。乍然上人の滅後に於て、之が分裂は一面亦止むを得ないことでせう。何れの宗教も此の傾向は免れないことであります。時代の變遷、社會の進歩につれて、幾分の相違があることも亦當然です。たゞ邪を以て正となし、大勢數を以て正義であるものとするに至つては又許しがたいことであります。

(三)若し分裂するとしたら、貴師は何れに屬すると思はれます、上座部ですか、大衆部ですか。

(四)私が禮拜儀の訂正を見たのは上人入滅の翌年京都勢至堂での記念別時の時でした。私も突然に此の訂正本に接したときは寢耳に水の驚きでした。而も遂一之を拜讀するに至つて、更に心からいやな氣がしたのです。何と云ふいやなやり方であらう。之では丸で改惡だ。それに今日まで自分が之について何事も聞かないのはおかしいことだ。之には何等がそこに理由があるではないかと。それが私の僞らない感じでした。

(五)夫れから後も、今尙私の心には從來の禮拜儀が數等勝れていると云ふことに就て寸毫の疑いもありません。

(六)「も」のところが「は」となつたのはどうした理由か私の知らないところであります。上人生前からの御話によれば感情も智慧も意思もと連絡して語られたやうです。然に之が「は」となりましては其の歌が一々孤立してばら／＼になつたやうです。

(七)も(八)も全く貴師と同感です。「人は皆」を「終局には」と殊更訂正せねばならぬ理由がどこにありませう。之には全く詩が説明になりました。偉人の聖語が、凡俗の言葉に改惡せられた感じがします。

です。然るに「無駄なき生活」や「不死の自覺の第三期」の私の自覺からだん〳〵研究して見ると從前通りの方がいゝ樣に思はれて參りました。上人も神戸で御目にかゝつた時は從前の通りがよいと言つて居られた樣でしたが、其の理由はどうで御座いましたかね。その時には大して問題にして考へなかつたので、その理由は頭に殘つて居りません。(五)

今禮拜儀の訂正された部分を見ますと、無對光佛の一段「絶對無限の光明に、攝化せられし人は皆、諸佛と等しき覺位を得、大般涅槃に証入す」とあるを「攝化せられし終局には」となつて居る。又「如來智慧の光明に、我等が無明も照らされて、佛知見を開きては、聖なる眞理示さるれ」とあるを「佛の智見を開示して如來の眞理悟入るれ」となつて居る。又歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛のところが「苦惱も、無明も、意志も」とありしを「苦惱は、無明は、意志は」とものがはになつて居る。「も」が「は」になつた爲に、清淨、歡喜、智慧、不斷の宗教心理の一段が「も」の時は連絡があり、纏りがあつた樣に思へるが「は」になつた爲に無論連絡はあるが感じの上に離れ〳〵の樣に思はれます。纏りといふ点から「は」よりも「も」の方がこれもよい樣に思へる。(六)又、佛知見を佛の知見と、そこにどんな意義があつて訂正されたか知らないが佛智見の方が呼び力があつていゝ。(七)「如來の眞理」も「聖なる眞理」がいゝ、なぜならば、智慧光の一句に、如來智慧の光明にと書き出し、如來の眞理と、短い一句に如來が二つもあるは、詩的表現として之を見るとき一寸まづい樣に思へる。矢張り、聖なる眞理とした方が勝れて居る樣に思へる、只、進んだ表現としては訂正前開示だけを開示悟入に訂正は確に進歩である。(八)上人も神戸で御話した時、こんな意味を述べられたと思ひますが、確にそうでしたね。

然し此の如き訂正は大問題でもないと思ひます。私の問題になるのは、無對光佛なんです。私の懷疑は茲にあるのです。故上人は臨終間近になつてなんで、こんな訂正を遊ばしたのであるか、(九)なぜ諸佛と等しき覺位を得る事を終局に局限し成佛を特殊化されたのであるか、覺位に入るのは終局に於てのみしか出來ないと何故にせられるのであらうか？　こうした樣な疑問が、ぞくぞくと生じて來るのです。(一〇)

私は最近人格の完成は、終局に求めてはならんと考へて居ます今の一念一刹那、一擧手一投足の裡にあらねばならぬ。人格の完成を今味ふのと、終局に求めるとによつて、宗教の死活問題となると思ひます。念々刹々の完成を味ふものは生ける生命の宗教となり、終局に求むるは不充足生活の死せる宗教となる。無對光佛の訂正問題の中に光明會の死活問題が横はつて居る樣に思はれる

「佛の智見を開示して、如來の眞理悟入るれ」と僅の處に佛と云ひ、如來と云ふのがあまりに耳ざわりです。それに佛の智見と云ふよりも佛智見と云ふ方がきゝつけたせいか力があり、開示してと云ふよりも、ひらいてはと讀む方が民衆的であります。それに「如來のまことを悟入るれ」と「聖なるまことしめさるれ」とに至つては更に比較になりません。まして「佛の智見を開示して、如來の眞理悟入るれ」と佛の智見をひらきて如來のまことしめさるれに至つては全く問題にならないのであります。

(八)訂正前のもやはり開示悟入となつてゐます。即ち「佛智見を開示ては、聖なる眞理悟入さるれ」とありますよ。

(九)私も初めは何故にかゝる拙劣な改訂をされたのかと不審に思つてゐました。然し今日では其の理由も判然しました。それは或る人の願い出によるのでした。私はこのことをその人からきゝまして、非常に殘念がつたことであります。

(一〇)貴下に此の疑問の起るのも尤なことです。

(一一)私には此の訂正を見ましたとき、之は光明會が將來二つに別れる前徵でないかと思はれました。此の禮拜儀を境として、二つの流れるを作るのではないか。そしてそれが反つて眞僞を分つ大なる如來の御心であるとさへ感じました。

(一二)この覺位については上人自らが、卵と鷄との例を以て話されたことであります。「卵の間は鷄とはいはぬ。乍然卵が親鳥にあたゝめられて、孵化すれば已に雛鳥であつて彼も鷄の仲間である。人も亦そのやうに、如來樣に育まれて信仰の道には入つたとき、御名を呼ぶ佛の子となるのである。そしてそれを菩薩といふ。菩薩は已に諸佛と等しき覺位である」と又、このことを上人は梵網經の「衆生佛戒を受れば即ち諸佛の位に入る、位大覺に同じ已れは即ち諸佛の子なり」と云ふところを引いてしきりに説明せられておりました。「已に入信の人々は凡夫にして凡夫でない。已に佛子そのものである」と。而て此の佛子の自覺が即ち諸佛と等しき覺位にあらずして何でありませう。佛子もとより佛ではありません。乍然そこを攝化の一念に佛子としての大般涅槃を示さうとするところが所謂詩としての詩たる所以であります。それを終局にはと説明的してしまつてはどこに詩としての詩

我々は此の意味に於てどうしても訂正を取り消したいのです。(一二)

無論理想は妙覺の成佛に置きたいのですがさらばと言つて終局の妙覺に到達しなければ諸佛に等しき覺位を得ないといふ事にはどうしても賛成出來ないのです。(一三) 私は私の現在申しつゝある念佛に就て反省してみるに今申す一念の念佛が、ある目的の手段に非ずしてそのまゝ目的なりと見なければ落ちつけない狀態にある換言せば念佛の戀しさに念佛するのである、念佛目當ての念佛を申すといふ氣分です。故に今の一念がアルファーであり、オメガーである、又全部であり、永遠でもある。一念に一度の往生、刻々の成就、即永遠の成就、今の一念に於ける自已完成が永遠の自已完成である。成就は佛道修行の終局にあるに非ずして、今の一念一念に成就がある。一念一念の成就があつて終局の成就ともなるのです。今の一念一念に成就なくしてどうして終局に成就があらう。それは恰も零を百加へても零となると同じです。此の意味に於て私は絶對無限の光明に攝化せられし一念からの成就である諸佛と等しき覺位を得ると信じたい。終局に於て諸佛と等しき覺位ならば、終局迄到達しきれなかつた佛道修行者は、無駄なる佛道修行となる佛道修行は一念一念の成就であつて決して無駄はないと信じたい。(一三)

たる資格がありませう。若しどうしても終局には云はないと、とんでもない虚大妄想者が出るので困ると云ふならば、それは別なところで終局だぞと説明すればよいことです。それをわざ〳〵「終局には」と改めなければならぬ言ばれがどこにありませう。然にそれが他に依つて訂正をよぎなくされたと聞いてば愈々仕やうがなくなりました。

(一三)念佛は正しく私共が如來の絶對に歸依する姿であります。法然上人も一念無上の大利なるが故に、念々も亦之念々無上であると述べられ居ります。念佛の中には一々の念佛が絶對であつて、そこには何等の不足もないものであります。從て諸佛と等しき覺位と云ふ味いも攝化せられた終局にのみ味はふ必要はないのであります。念々の中に諸佛と等しき覺位の妙諦にふれて、念々に生きて行くところに、名体不離の靈感も私共の心に眞に味はされるのであります。從て皆と云ふところに自らも入り、人も入り一切をもらさぬ普邊平等の大悲も味はれ、諸佛と等しき覺位を得ると云ふところに、自らの往生を喜び大般涅槃に證入すと讃しては、全く自已本心の滿足に入るのであります。

吾朋便り

唐澤別時三昧會に就て

土屋觀道

今夏の唐澤の集りは近年にない多數の參會者でありました。而も其の熱心な求道ぶりと其の集まる人の多くが何れも活動の中心人物が主として多かつたことは私共の最も喜びとするところであり、最も宗教は單なる學歴や年齢のみを以て之を誇るべきものでなく、眞にそれによつて私共が如何に生きて行くかと云ふことによつて、其の信仰生活の是非を判談すべきでありますが、又乍然一方今日の社會生活に於て、如何程度の人々が其の宗教の集團に集まりつゝあるかといふことを知るのは私共の將來に於て、少からぬ參考になるものがあると思ふのであります。從て左の一綱を參考の爲めに集めて頂きましたから、皆さんの御參考にまで供します。但し之は唐澤三昧會百二十三名の中に於て、隨意に出していたゞいた人七十五名に就ての分であります。それについて、私は其の人の男か女、そして只今の年齢、入信の歳、求道の動機、及び其の職業、學歴の五つを以つてしたのであります。

一、男女の性別

男	女	合計
四五	三〇	七五

之を以て見れば全体の上に男六、女四の割として、先づ男女同數と見るべきも、一般佛教殊に今回の寺院佛教には女の數の多いのに比して、男子の數の多いのは注目に價することと思ふのです。

二、參會者の年齢

年齢	男	女	計
一〇—二〇	五	二	七
二〇—三〇	一五	五	二〇
三〇—四〇	一二	二	一四
四〇—五〇	八	一	一九
五〇—六〇	三	七	一〇
六〇—七〇	一	三	四
七〇—八〇		〇	一
八〇—九〇	以下無シ		〇

之を見れば二十才以上五十才までが一番多く、實に全体の七割强五十三名を占めているであります。こゝに於て、私共の集りが如何に活動期の人々の集りであるかを見るのであります。

三、入信の時の年齢

入信の歳	男	女	計
一〇—二〇	二	二	四
二〇—三〇	一三	三	一六
三〇—四〇	一一	四	一五
四〇—五〇	六	九	一五
五〇—六〇	二	三	五
六〇—七〇	二	〇	二
求道中	四	四	八

四、求道の動機

求道の動機	男	女	合計
無常觀	三	〇	三
老病	五	一	六
愛別離苦	四	七	一一
家庭問題	六	三	九
生の不定	四	四	八
生の向上を求めて	四	八	一二
親近の信仰に感じて	三	一	四
法話を感じし	四	二	六
誘はるゝまゝ	八	一	九
人生研究の爲め	一	〇	一
偶然	一	一	二
不明	二	二	四

以上求道の動機については年齢、又は性の

相違、境遇によつて違います。

五、職業による分類

職業	男	女
僧侶	一	
神職	一	
教師	一	
醫師		
官吏	三	
銀行員	一	
農	七	
料理及旅館	三	
呉服商	四	三
機械商	一	
雑貨商	一	
洋酒鑵詰	一	
酒類問屋	一	
材木商	一	
店員	一	
家具屋		一
ぬしや		一
職人	一	
寫眞師		一
ミシン機商	一	
工業	二	
學生	七	二
無	五	一三
不明	一	七

之また、私共の集りが決して特種的でないことは其の職業が各種各方面であることによつても之を知ることができます。

◈御殿場山上のつどひ豫告

今夏唐澤三昧會の盛會に全國同志は今一度、今秋の十月御殿場大乘寺で秋期別時三昧會を開き度いとのことである。中秋富士の靈峯を眺めて淸い道友の集りをいたしませう。日時は追て發表します。

眞生社

六、學歷

學歷	男	女	計
無	一	二	三
小學	八	二	一〇
高等小學	八	五	一三
中等、學	一五	六	二一
高等、專門、大學	一一	一	一二
不明	二	一四	一六

以上の學歷に見るも、決して無學文盲の人は殆どないと申してよいのです。

尙之について色々の意見もありますが紙數もないので他日にゆづります。

定價一部十錢　半年六十錢　一年一圓
振替口座東京四七二八八番　眞生社
東京市芝區芝公園第十四號地九番
編輯兼發行人　土屋觀道
名古屋市東區東外堀町二ノ二
印刷人　佐藤忠義
東京市芝區芝公園第十四號地九番
發行所　眞生社

（大正十四年八月十三日　昭和二年九月十二日印刷納本　昭和二年九月十五日發行　（毎月一回十二日發行）　第六卷第八號
第三種郵便物認可）